

H氏とN氏の“交わり”の記録

本文書は1989年2月21日、日本の「地方教会」の実質的指導者であり、その出版部門である日本福音書房を運営するH氏が、リーに関する真実を語ろうとするアメリカ帰りのN氏(Ph.D.現米国大学教授)を呼び出し、午後2時から9時40分までH氏宅で行われた会話を、N氏がその場で記録したものである。この場にはH氏夫妻とN氏の3人が同席した。N氏は「これを交わりとは言いたくない、実質的には脅迫されたようである」と述懐している。なお、現在彼はこの内容は捏造であると言っているとのこと。

H氏の主張は、「リーに関する真実をそのままに語るならば、自分が顧みている多くの"幼い"聖徒らがつまづくことになる」と言うものである。しかしこのような態度は人間の尊厳を踏みにじるものであり、愚民政策である。聖徒あるいは教会はH氏のものではなく、神のものであり、このような主張こそ指導者としての彼の高ぶりと聖徒たちを自らのコントロール下に置き続けたいという意図を証明する。ちなみにH氏は、ある機会において、私に対して、ウイットネス・リーの強引な"ニュー・ウエイ"策で傷つき、悩み苦しみ、つまづいて離れ去った人々に関して、「あれは高い授業料を払ったものだ。はっはっはっ・・・」と語った。この時、私は決意を固めた。

注)は特記していないものは編者による。敬称略。

H氏:Y兄弟はリー兄弟の同労者である。教会の中で同労者の間で服従するとかしないとかはあってよいが、同労者と信者の間にその関係があると、地方教会の原則は踏みにじられてしまう。Y兄弟がリー兄弟にどのように従おうともよいのである。それは微妙な関係をもつものであるから。それぞれの教会はそれぞれでよい。他の教会を支配することはできない。その地方地方で異なっていてよい。ただしそこにいる人がつまづかないように配慮する必要がある。兄弟姉妹が顧みられていればよい。2つの事、1)地方教会の原則が守られていること、2)兄弟姉妹が顧みられていること、以上の2点があれば教会は互いに認め合わざるを得ない。教会を意図的に混乱させようとするグループがあるとすれば、私は彼らとは話し合う気持ちはない。それは分裂・分派であるから。ここで兄弟にまず確認しておきたい:兄弟は教会を分裂させようという意図を持っているのか?

N氏:もちろんそんなものはまったくない。

H氏:そうだと思う。私もそう信じたからこうして交わろうとしているのだ。静岡は2つに分かれたが、一緒に出来ないから分かれたのであり、あれで良いのだ。もし意図的に混乱させようとするグループがあればそれは問題だ。先日、清水のO兄弟から電話があり、“静岡にある教会が2つに分かれた”と言うので、私は彼に“そうなるのは当たり前だ。それはあなたがたがT兄弟を今までないがしろにしていたからなのだ”と答えた。どういう考えを持っている人でも受け入れる広さを持つーそれが教会だ。先回の火曜日の責任者の集会でOH兄弟がリー兄弟についていけないという表明をした。それを聞いて皆動揺し、それを理解できないと言うが、私は理解できる。OH兄弟の言動には2,3カ月前からの背景があるのだ。教会内ではどんな発言があってもよい。それができない体質であってはならない。現在、リー兄弟に関して消極的な話がなされているが、それが事実として受け入れるか否かということが、‘踏み絵’的になるという感じを自分は持っている。リー兄弟のことはいますぐどうのこうのということでなく、時間があってよい。

N氏:話を進める前に兄弟に確認しておきたいことがある。私が海外で得てきた資料は、兄弟もすでに持っていると思うが、兄弟はそれを事実と認めているのか、または単なる噂として疑いを持つ

ているだけなのか、リー兄弟の事、フィリップ・リーの事についてはどう思っているのか、あなたは彼らが間違っていることを認めるのか否か、確認したい。

H氏:それは間違っていることを認めざるを得ない。もうロサンゼルス・タイムズ紙にも載せられてしまったし、皆が知るのも時間の問題である。だから習志野の教会ではニューウェイについていくことをしなかった。この間の主日 OH 兄弟がここにきて2時間程交わったことであるが、リー兄弟のことは時が来ればちょうど柿が熟して落ちるように思っている。この事は90%まちがいないものと思う。今、嘘だと言っている人もいるが、時間が経てば暴露してくる。しかし今は争いがあり、無理がある。だが、先は見えている。主は放っておくことは有り得ない。必ず取り扱われる。必然的に訂正せざるを得ない。

教会は外部からのもの(迫害・攻撃)でつぶれることはない。それどころかかえって結束を固くする。恐ろしいのは内側からの発酵、内部告発である。日本の他の地方を見ても希望がある。B 兄弟も以前からミニストリーがおかしいと思っている。B 兄弟も変わってきた、なぜなら東京に交わりに来る。彼は現時点で良いと思われることをする、という態度である。私たちは大阪と決別したとは思っていない。札幌の HK 兄弟のところも2、3年後には(札幌の)N 兄弟と一つになる可能性がある。

M 兄弟は博士号を TD 兄弟のもとで取ろうとしてきたが、3年前から教会の方向が違うのに自分は TD 兄弟に合わせてまで取ろうとは思わないと考え、その後まったく話を進めていなかったが、最近周りの人から勧められて、再び TD 兄弟のもとへ行くようになった。彼は TD 兄弟も以前とは変わってきていると言っている。大阪ではフルタイマー達を他の地方へも送りだそうとしたが、Y 兄弟が止めるように手紙を TD 兄弟に出した。リー兄弟の話をした場合、それを受け入れるかどうかあ‘踏み絵’になり、兄弟姉妹達が右か左かのどちらかに行ってくれば良いが、そうでない落ちて行く人が出て来る。彼らにはそれが真実かどうか分からない。

N 氏:ある人から聞いたが、あなたは私が告げたリー兄弟やミニストリーの話に嘘があると言ったそうだが、どの部分が嘘なのか教えて欲しい。私も嘘の情報を人に伝えたくはない。私がこう聞くのはあなたを疑っているからではない。私自身が正確な情報を得たいがためである。

H 氏:私は嘘があるとは決して言っていない。これは誓ってもよい。ただ完全とは言えない、100%正しいとは言えない、と言っただけである。例えばビデオの訓練費などは正しく使われている。こういうことを言い出すと泥試合になる。例えば‘教会はお金をごまかしている’とか、ある人は‘H 氏の集会には出るな’と言っている人もある。この前は横浜の兄弟(誰かは不明)が電話をかけてきて、‘ある兄弟の母親がニューズウィークの記者に聞いたところ、リー兄弟は日本に隠し財産を持っているとのことだが、それは本当か?’と尋ねた。リー兄弟が隠し財産を高輪に持っているというのは、あれは私の勤めていた会社‘シ〇リ〇毛皮’の社長の持ち家であって、そういうことを言うのはまったく争点がずれている。¹

リー兄弟が‘私は神の託宣である。私が話しているとき、人の声に聞こえるであろうか’と言ったにしても、そこだけを取り上げてパラノイアとか言って非難するのではなく、それを言っている文脈を見

¹ これはあるカトリックの母親をもつある教派のクリスチャンが、“地方教会”のメンバーから改宗を誘われていた際に、ウイットネス・リーにまつわる噂をその母親から聞いたために、関係のあったニューズウィークの記者に調べてもらった所、このような回答を得た話を、ある“地方教会”のメンバーが聞いて驚き、彼がその確認を H 氏に求めた経緯のこと。Y 氏の書簡によると、このニューズウィークの記事(私はその存在を了知していない)に従って中華日報が記事にしたが(記事の中国語原文のコピーを所有しているが未翻訳)、“地方教会”は意義を申し立てて、中華日報が訂正記事を出したとしている(私は未確認)。

なくてはならない。²

リー兄弟のことはおかしいと思われているが、全部が言われている通りだとは限らない。それを言うことによって落ちて行く人の責任は誰が取るのか。現在、曲兄弟も言われたように、世界的に全教会で問題がある。しかし日本ではY兄弟が安全弁の役割をしているので、それらのことが兄弟姉妹のところまで届いていない。しかしこうしてあなたが帰国し、アナハイムとかバンクーバーにも日本人の兄弟達がおり、そういう人からいろいろと情報が入って来つつある。それらの情報を聞いて、私たちはよいが、落ちる人が出て来る。第1コリントの11、12章でも、いろいろ問題があるが、その中で弱い人、貧しい人を顧みるということが言われている。

リー兄弟が5月の連休に特別集会に来られることについてY兄弟を責めても始まらない。ことの成行きでそうなってしまったからだ。今回私たちが台湾にリー兄弟に交わりにいくが、場合によっては彼が日本に来ることを断わらなくてはならないかもしれない³。現在こういう状況でどうのこうの言うのであれば、私たちは同志打ちしなくてはならないかもしれない。2月26日にY兄弟、HG兄弟、私でリー兄弟に交わりに台湾に行くが、そこで私はリー兄弟に話すつもりだ。まず日本での問題、そしてリー兄弟が日本で強気でやるのであれば、混乱が生じるであろうこと、を。だからリー兄弟が日本で強気でやるのであれば、彼の来日を断わらなくてはならないと思う。リー兄弟が何というか分からないが、それならば行かないと言うかもしれない。あるいは混乱を起こさないように集会するかもしれない。

N氏:リー兄弟の面前でH氏兄弟はそういうことを言うことができるのか。あなたはそうは出来ないと私は思う。

H氏:いや、できる。私は言える。自分は自分の感覚で交わる。大事なことは地方教会の原則を歩むか否かであり、もしあなたがたがそれを歩まないならば、自分はあなたがた(高田の馬場を含め、N氏ら)とは交わりができない。現在は混乱を避けて行けば必ず嵐は去る。

N氏:ニー兄弟の‘正常なキリスト者の教会生活’の中では、教会とは主の権威があるところである、もしそれがなければもはや教会ではない、と言われているが、現在の教会には主の権威はどうなっているのか、それを最高のものとする様子がない。86年2月のリー兄弟の訓練集会において、リー兄弟に全面的に従うということについて、多くの長老達がサインをした⁴。これはあるべき姿ではない。

H氏:あのサインは認めていない。Y兄弟もそれについては防衛柵を張っている。あれは汚点である。主の主権に代わるものはない。それは不自然である。

1930年代にニー兄弟に対する批判が教会の中に起こった。その批判が出たときニー兄弟は6年間奉仕から身を退いた。その際、ニー兄弟は姦淫しているとか、女性と同棲しているとか、製薬会

2「文脈をみなくてはならない」という台詞は、彼らのよく用いる弁明手法である。これはある長老集会におけるウイットネス・リーのメッセージの内容を知った精神科医師 OH氏が、リーをパラノイアであるとし、リーに従えないと宣言した事を言っている。

3 その後ウイットネス・リーの台湾における特別集会に参加した彼の帰国後の発言は「台湾は素晴らしい。何の問題もない」であった。

4 ウイットネス・リーに対する忠誠を誓わせるために、世界各地の"地方教会"の長老や責任者達に署名をさせた事件。この署名リストのコピーは編者のもとにもある。またさらにウイットネス・リーは、ある長老集会において、自分に対する忠誠の意を表すために、長老たちに土下座させてまでその意志を表明させた。このような場面は古の典型的中国独裁者の行動を髣髴とさせる。

社をつくったのは物欲があるためだとか、そこで金を儲けて貯め込んでいるとか、言われた。しかしながら6年後に真相がはっきりしてきた。実は製薬会社の利益は教会の働きのための準備金であったことなどが明確になってきた。教会の中で一つ心で働かなくてはならない人達がこういうことで乱れてはならない。その当時の地方教会は宗派に受け入れられない状態であったから、内部で一つ心が乱れてはならなかったのだ。6年後にニー兄弟が戻ってきて、長老たちに、この道を取るのであればサインをせよと言ってサインをさせた。それは結束をするためであった。長老達はニー兄弟に戻ってきて指導して欲しいと思ってサインをした。これは専制主義の実行ではない。これは前述した流れの中で成就したことである。

習志野ではリー兄弟のことは分かっているから、それから(リー兄弟から)少しずつ離れて歩いて行けばよい。少しずつ変えて行けばできることである。主日の集会でも私たちは台北で何が行われていても興味はない。責任者が交わって語るべき事を決定している。関東地区でも1年前の状況とは現在は違う。現在はニューウェイの挫折感がある。それゆえに修正して行く方向にある。これは主の御手である。以前はH氏はリー兄弟のニューウェイを阻止しているという批判があり、一部の兄弟から自分は危険視されてきた。今はかなり状況が変わっている。ニューウェイにおいてもドア・ノックを一生懸命にやって成功している例(例えば小田原)もある。それはそれでよい。現在関東ではリー兄弟に従うと言う人はごく少数である。しかしながらリー兄弟を悪魔よばわりするところまでは行っていない。その内にはっきりしてくる。ここであなたに聞きたいが、日本の諸教会を分裂させる意図はないのだろうか。

N氏:もちろんそんな意図はまったくない。

H氏:3年後、5年後という長期的な視野でもものを見なくてはならない。Y兄弟もリー兄弟に対して変わっていく。教会は祝福されて意味、実体がある。教会が祝福されていれば、その状態で他人をも改革できる。自分は首を切られても関係ない。現在他の集会でも福音集会を始めている。リー兄弟はいまだに福音集会には反対であるが、習志野が率先して始めたことで、こんなに(福音集会をする教会が)増えてきている。だから習志野には教会の実体があり、祝福されている。大阪とも問題はない。関東地区では正しい地方教会の道をやっていける。私はY兄弟の公正さを見ているし、信じている。いろいろと違ったところもあるが、気持ちの上でずれが生じるから私は譲歩している。しかしながら、教会が混乱することには私は譲歩しない。

リー兄弟を呼ぶか否かは争点ではない。問題は正常化することである。もし呼ばないということになれば正常化できる人をも失ってしまうことになる。責任者の集会で5月の連休に特別集会をしたかどうかという提案があった。それはニューウェイで離れ離れになっている兄弟達が一度集まってもよいということである。張兄弟は忙しくて来れないが、12月には来てくれるとのことである。曲兄弟は秋に来てくれる。香港のトウ兄弟がよいと言った人もいたが、ヨセフ・ファン兄弟がアメリカにいたので、香港を離れられない。リー兄弟を呼ぶことについてもまだこれからいろいろと問題がある。それは特別集会が全国的なものであるために、宿泊の問題とか、集会の場所をどうするかなどである。しかしリー兄弟を呼ぶことについては責任者の間では問題はない。それはよく根回しがされているからだ。ただもし特別集会でニューウェイを押し進めて行くようなことが話される問題がある。これについてはOH兄弟が長老の集会でリー兄弟が来ることについて反対の意志表示をした。しかしこれは少数派であり、他の人たちは皆Y兄弟のやるとおりでよいと聞いている。だからリー兄弟を呼ぶことに無理はない。近く私がリー兄弟の所に交わりに行くとしたら、Y兄弟も自分も行くと言った。

N氏:教会の中での最高権威は靈的権威である。これまでの話を聞いていると、どうも人間ばかりが動いており、靈的権威がどこかへいつてしまっている。人が考えて事を動かしている感じがする。もっと靈的権威を尊重すべきである。

H氏:教会は合議で導くものではない。新約聖書でも、いろいろな人が語ってはいるが、最後はペテロとかパウロが決めていっている。リー兄弟の来日についてはひっくり返すほどの理由はない。私はY兄弟を責める気持ちはない。これは成行きでそうってしまったことである。こうなった以上はこれを祝福に変えなくては損である。ここでN兄弟に聞きたいが、どういう形の教会が一番よいのか？

N氏:例えばドイツのように事実をある程度皆に知らせて、今の状態のミニストリーとは切り離して進んでいく。ドイツではそれで一人一人が力強く進んでいる。落ちる人もいない。指導者がそのような形ではっきりと示していけば、絶対に大丈夫である。

H氏:1週間前にヨセフ・ファン兄弟がアメリカにいる。自分の毛皮関係の友人でアンリと言う人から話を聞いた。またユー姉妹はアメリカとか台北と交わりを持っている。ビル・フリーマンの教会もより良いわけではない。

肉もついて来るものである。誰も24時間靈に居続けることは困難である。誰も人を裁くことはできない。そうではなく自分が照らされる問題である。例えば真理とは何かですら、ひとめする話題である。理想通りにいくかどうかは非常に難しい。交わりも靈の導きで行ったかどうか言うのは非常に困難である。改革についていけない人がでる。

N氏:その反対に改革しないが故についていけない人がすでにいる。私は何人か知っている。

H氏:ちょっと待つて欲しい。主を越えて行くことはできない。

N氏:現在の地方の教会は宗派ではないか？中世にカトリックしかなかった時代において、それは腐敗していた。カトリックは一つであったかもしれないが、それは腐敗していた。それに対してルターが宗教改革をした。回復であるはずのこの教会が腐敗したら、もはや回復ではない。ここでルターのように腐敗した体質を変えていく必要がある。

H氏:もしそれをしたら血みどろの戦いになる。

N氏:(その言葉でひじょうに驚いて)私はどうしてそういう言葉がでるのか分からない。そういう言葉は私たちに対してではなく、リー兄弟のミニストリーに絶対的に従っているような大阪の教会などに対して言う言葉ではないか。

H氏:いや、血みどろの戦いになる。離縁状を出すことは得策ではない。リー兄弟を排斥することが問題なのではなくて、体質の正常化がメインテーマなのである。私は主の御手を信じる。その証拠は林口とか第6集会所とかも結局は失敗した。第6集会所は購入したものの、そこの住民が立ち退かなかったのでうまくいかなかった。林口は建物を建てるのにふさわしくない土地(湿地帯)であるために、駄目になった。

台北のフェスティバルも大雨でできなくなり、彼らは挫折感を持った。これらのことから見ても、自分は主に対する恐れを抱く。だから慎重であるべきだ。日野の兄弟とか、K兄弟とかと私は交わってきている。私は彼らも(リー路線から徐々に離れることに)巻き込めると感じている。しかし混乱を起

こすのであれば、あなたがたに来て欲しくない。皆リー兄弟に対する識別力はある。教会はいろんな人が来るが、すべての人にオープンであって、皆内の教会の人であると見なす。

N氏:ニューウェイ、献金、方向転換のことなどについて説明がある。説明なくしてあちらだ、こちらだと言われても兄弟姉妹達も納得しない。献金についても上の人(責任者)だけで決めて、兄弟姉妹達一人一人に説明がないのはおかしい。

H氏:それは場があればそうしたらよい。そのことは張兄弟にも尋ねたが、今はその必要はないと言っていた。あちこちでいろんな批判が出ているが、例えば横浜のS姉妹は習志野にいる娘さんに電話してきていろいろと話している。それは私の耳にも入ってきている。今の体制を徐々に修正していくからよい。責任者の発表のしかたによっても説明がいろいろと違って来る。献金も別に強制したわけではなく、各自の負担(重荷)でやったことだ。いままで競争心でやったところもある。例えば小田原、藤沢である。いまリー兄弟についていくとかいえないとかの問題ではなく、関東地区は一つにまとまってやっていきたいのだ。日本福音書房についてもリー兄弟の委託で会社としてやっているだけだ。Y兄弟とも一緒にやっていきたい。それは服従するとかしないとかいうことではない。それは同じ気持ちでないと混乱するからである。Y兄弟に悔い改めよとは言えない。人には悔い改めよとは言えないものである。

教会の中でリーダーシップがないということはない。あつてよい。その霊性が問われる。張兄弟の人となりを見ても、彼の霊性はそれにふさわしい。だから張兄弟の歩調に従って進もうと思っている。彼の歩調は模範である。自分でなければ駄目だということではない。N氏兄弟の持ってきた文書は証拠が不十分だという人もいる。そうすると党と党との争いになる。なしくずしである。(リー兄弟のように)誇っているだけでは党と党の争いにはならない。

高田の馬場のようにリー兄弟とそのミニストリーのことを批判するな。それを聞いた人がつまづくことになる。

N氏:それは事実を語らないからである。実際つまづいている人がいる。

H氏:それは誰だ。

N氏:例えば私の姉とか母である。私の姉はもう組織はいやであると言っている。

H氏:では私が行って、私が交わる。

N氏:いやそれはけっこうです。

H氏:ドア・ノックで人を失ったが、しかしその逆をやって人を失いたくない。高田馬場のようにあれこれ言うことは泥試合になる。私は騙すつもりはない。高田馬場がエンジョイしてくれていれば、お互いに批判し合わなくても方向付けできる。マーク兄弟はこの間保谷の集会に行って、その兄弟姉妹を怒らせてしまった。

こういうことが起こると高田の馬場が非難されることになる。K兄弟は反リーではない。このことも挑発的に行くと逆効果になる。これは魚釣りと同じである。高田の馬場のようにやることは賢くない。熟するのを見るべきだ。OH兄弟に対しても手を打つな。リー兄弟が精神病であると思っている人はいない。そういうことを言うと逆に皆リー兄弟について行くと言い出す。Y兄弟を排斥する勢力がある。私はY兄弟を後押しすると言っている。曲兄弟が来られたときは、問題はアメリカのことで、

対岸の火事であると思っていたが、N氏兄弟が帰ってきて、日本でも問題になった。これらのことに手を打つべきか質問したところ、曲兄弟は何も言わずに他の話題に移られた。“教会の諸事”を家庭集会で読んでいるが、これはとてもよい。責任者がどうすべきかがよく書いてある。

N氏:こういう状況でこういう書物を出すことは意図的である。

H氏:いやそうではない。そういう目でみるのではなく、純粹に見るべきだ。これはとてもよい本だ。日本の諸教会はリー兄弟の建てたものではない。私は東京でできなかったことが、ここ習志野へ来てはじめて出来た。福音の原則をいま私は交わっている。

今起きている問題を吉祥寺集会のベックという人がすっぱ抜きをやろうとしている⁶。

Y兄弟は今の段階では交通整理ができない状況である。私(H氏)や他の兄弟は一地方の兄弟に過ぎない。情報は時が経てば自然と入って来る。

N氏:いまのこの教会の体質を保持してこのまま行くのであれば、同じことをまた繰り返すのではないか。ニューウェイで救われているかも分からない人を無理にバプテスマしたりしたが、そういうことをされた人は二度と私たちのもとにはこないだろう。

H氏:いろいろと言うことひとつづつが‘踏み絵’になる。そうするとぶつかる以外になくなる。そうすると互いに傷つけ合うことになる。

N氏:先ほどあなたにそれらのことが事実と認めるかどうか聞いたが、あなたは事実と認めたと言った。それなのに事実と分かっていることを、何故‘踏み絵’と言うのか。今までの話から感じるが、リー兄弟への異常なまでのこだわりがある。これはもはや宗派ではないか。キリストだけでなく、リー兄弟を受け入れるか否かが問題となっている⁷。

H氏:宗派という言葉は兄弟姉妹の気持ちを逆立てることになる。地方教会の原則を歩めばけんかする必要はない。問題は地方教会の原則があるかどうかである。

N氏:先ほどから聞いていると、事実を語ると落ちて行く人が出るとくりかえされるが、今回私はドイツを見てきたが、事実を全ては話さないにしても、ミニストリーの腐敗を告げ、ミニストリーと断ち切っているが、人数は減っていない。ジョン・ソーなども人数が減るところか、非常に個人が強くなっていると言っている。だから人ではないということが分かる。どうしてドイツでできたことが日本でもできないのか。事実を語って人をつまずかせることはない。むしろ、黙っている方が人をつまずかせることになる。

H氏:ドイツはジョン・ソーのような指導者がいるが、日本にはいない。日本の長老のレベルが低い。そこで今年の暮れに張兄弟を迎えて訓練集会をする予定でいる。自分はいままで日本ですべてをかけてやってきた。血を流す程に働いてきた。一人の人を救って教会へ導くことは非常に大変なことである。兄弟はそれを分かっているのか。そうしてこれまでになってきたのに、今回のことで失いたくない。一人を得るのは大変だ。私は血を流すほどにやってきた。

(目に涙を溜め、それを拭きながら)

6 何故唐突にここでベック氏が出るのか不明である。その後彼が"すっぱ抜き"したことは聞いていない。

7 するどい指摘である。この団体ではキリストを受け入れただけでは認知されず、ウイットネス・リーを受け入れることを実質的に強要される。むしろ"踏絵"になっているのはウイットネス・リー自身である。

こうやって得たきた人を失いたくない、彼らを愛している。

N氏: 兄弟は人を失うことを恐れているが、私たちはそれよりも真理に基づいて歩みたい。事実は事実である。話し方は十分思慮深くして、とにかくなんらかの説明をすべきである。そして方向転換し、聖書に基づいた歩みをすべきである。それが重要であり、その結果を私たちが思い煩う必要はない。結果は兄弟が先ほど言われたように、主の御手に委ねればよい。

(ここでH氏兄弟は突如激怒して、持っていた先ほどの‘教会の諸事’を手を振り挙げてN兄弟の目の前のテーブルに思いきり叩きつけた。バーンというものすごい音がした。そして次のようにN兄弟に怒鳴りつけた)

H氏: 兄弟はいままで血を流すほどに日本でやってきたのかぁ！！！！！！

N氏兄弟は、恐ろしさを心底感じ、ここで張り倒されるのではないかと思ったが、手を出した方が負けであるから、何をされてもよいと思っていた、彼はこれを聞いて何か一部始終が、つまりH氏兄弟は自分の力でやってきたのだということが分かってしまったように感じた、と述懐している

N氏: しかし兄弟、それは主が兄弟の内側で働いて、主がされたことであって、兄弟の力でやってきたことではないでしよ。

H氏: もちろんだ。自分は誇っているつもりはない。

(ここで彼は急に静まっていく)

自分はビジネスをやってきた人間である。ビジネスの世界で自分はいろいろと学んできたが、自分は自分に合わない不穏分子を切ることができる人間である。しかしここは教会だから、そこまではできない。しかし、過激な発言はやめよ。教会の中では何をしてもよいが、しかし過激な発言はやめよ⁸。

Y兄弟と1年がかりで交わってきた。F兄弟、K兄弟らと交わってきた。いろんなやり方はあっても構わない。(リー兄弟の)教えは受け入れて行く。しかしながら30年前にリー兄弟がしたレビ記のメッセージよりも今回のもののほうが冴えていない。だからリー兄弟のやっている路線でこれから押し進めるつもりはない。

(ここで高田の馬場の集会に出ているある姉妹から電話があり、H氏兄弟はその人に“このような状況の中では彼らは宣戦布告すべきではない”と説得していた)

N氏: 兄弟は一匹の子羊も失われたくないと言うが、私も一匹の子羊である。教会がこのまま行くのであれば、私はついて行けず、失われてしまう。

H氏: (頼み込むようなようすで) 兄弟、きょう交わったことを本当に分かって欲しい。(これを繰り返す)

N氏: H兄弟のいわれることは分かった。しかしこれは私がドイツで教会のビジョンを初めて見たときの事と同じで、その見たことには逆らえないから、それを皆に話した。これと同じ事である。だから見てしまったことは、自分の心には逆らえないし、人に語るのも非常に自然である。

8 最も過激なことを語っているのはH氏自身である。この言葉は実質的にほとんど脅迫である。

H氏姉妹:そうね、そうね、そうよね(と相づちをうつ)。見たことはしかたないわよね。

N氏:H兄弟の言われることは分かった。しかし、次の2点において同意できない。1つは事実を語ると人が落ちると言うが、反対に言わないことでつまづいている人がいるのだから、こちらの方が重大な問題である。2つめは、徐々に軌道修正できると言うが、それはきわめて楽観的な見方であり、私はむしろ悲観的に見ている。私はできないと思う。このまま一路線でするずると行ってしまうのではないか。

* * *

これで会話は終わり、彼らは分かれる。H氏兄弟はN氏兄弟に泊まっていくように言ったが、N氏兄弟は恐いのでとにかく帰りたかった、と述懐している。